

引切塚 II 遺跡

—民間開発・宅地造成に先立つ埋蔵文化財発掘調査—

1993

前橋市教育委員会

引切塚II遺跡報告書の刊行にあたって

今般、第三次青葉台（当社分譲住宅地の名称）分譲住宅造成工事の計画にあたり、第一次青葉台に統いて古代の文化遺産が埋もれているとの事で、計画当初より前橋市教育委員会をはじめ関係各位の方々にご相談・協議を進めてまいりましたが、平成4年9月に発掘の運びとなりました。

今から約1,400年前の古墳時代の我々の先人の住居跡が現れ、「かまど」や土器類などの遺物を見て、そこに暮らした人々も自然と上手に共存し、人を愛し、家族の団欒を持ったのではないだろうかと楽しく想像することができました。

そのような住宅地に適した土地に、今再び住宅団地を計画できますことは幸いであり、当時のようないい家庭が数多く築かれることを願ってやみません。

最後になりましたが、多くの調査や事務に追われるなかで、予定通りの調査を進めていただきました前橋市教育委員会の皆様をはじめとして、発掘に協力していただいた地元の方々、関係各位に深く感謝申し上げ、益々のご活躍を心よりお祈り申し上げ刊行の言葉といたします。

平成5年3月

市川建設株式会社

代表取締役社長

市 川 友 久

序

引切塚II遺跡が所在する群馬県前橋市は、関東平野の北西部に位置し、北に名峰赤城山を望み、坂東太郎の名で知られる利根川や詩情豊かな広瀬川が市域を貫流する、水と緑に恵まれた人口28万余を有する県都であります。

前橋の地形は、南部に広がる前橋台地、市の北西から南東にかけて帯状に広がる広瀬川低地帯、そして今回調査しました引切塚II遺跡が立地する赤城火山斜面の三つに分けられます。その中でも赤城火山斜面は、日本でも一二を争う日照時間の長い地域であり、また古代の遺産が広く分布していることで知られる地域となっております。

昭和60年度の本遺跡に隣接する引切塚遺跡の発掘調査では、住居跡・堀立遺構・土坑・古墳の石室等が発見され、地域の古代史の空白部分が埋められてきています。

このたび市川建設株式会社より、市内青柳町における分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財確認調査依頼が前橋市教育委員会に提出され、調査を実施しましたところ、古墳時代の住居跡が確認され、遺跡地であることが分かりました。遺跡の取り扱いについて協議しましたところ、現状での保存は難しいということとなり、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。

調査区域は、開発予定地の道路という限られた部分の調査でしたが、住居跡・竪穴遺構等が検出され、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり、物心両面にわたりご協力をおかけいただきました市川建設株式会社の方々、並びに発掘調査・整理作業に従事していただきました方々に対し厚くお礼申し上げます。

本報告書が南橋地区の歴史を解明していく上で、少しでも参考になれば幸いに存じます。

平成5年3月

前橋市教育委員会

教育長 岡本信正

例　　言

- 1 本書は、市川建設株式会社の宅地造成事業予定地における発掘調査に関するものである。
- 2 調査は、前橋市教育委員会管理部文化財保護課埋蔵文化財係が担当し園部守央・井野誠一・戸所慎策・新井真典・上野克巳・新保一美で現地調査を行ない、飯島勝亥・市川浩也・清水信子・白井晃子・土岡志津子・原慶子・森田典子が参加した。平面図は篠原工務所の協力による。
- 3 本書の作成にあたり、整理作業は赤城美代子・栗岡エミ子・飯島勝亥・大塚美智子・柴崎まさ子・松田富美子が行ない、綿貫綾子（群馬町教育委員会）の指導を得た。
編集・執筆・遺物写真撮影は新保一美が行なった。
- 4 本遺跡の所在地は、前橋市青柳町字引切塚876-19外で、調査面積は220m²、略称は試掘時点の遺跡コード2B3とした。
- 5 調査期間は、平成4年9月24日から10月7日までの、実質8日間である。
- 6 遺跡の略称は次のとおりである。

H…住居跡　　T…竪穴状遺構

- 7 遺構・遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構全体図…1/400、1/100　　住居跡…1/80　　電図面…1/40　　遺物…1/4

目 次

は じ め に

I 調査に至る経緯	1
II 位 置 と 環 境	3
III グリッド設定	3
IV 基 本 層 序	3
V 検出された遺構と遺物	5
VI ま と め	11

I 調査に至る経緯

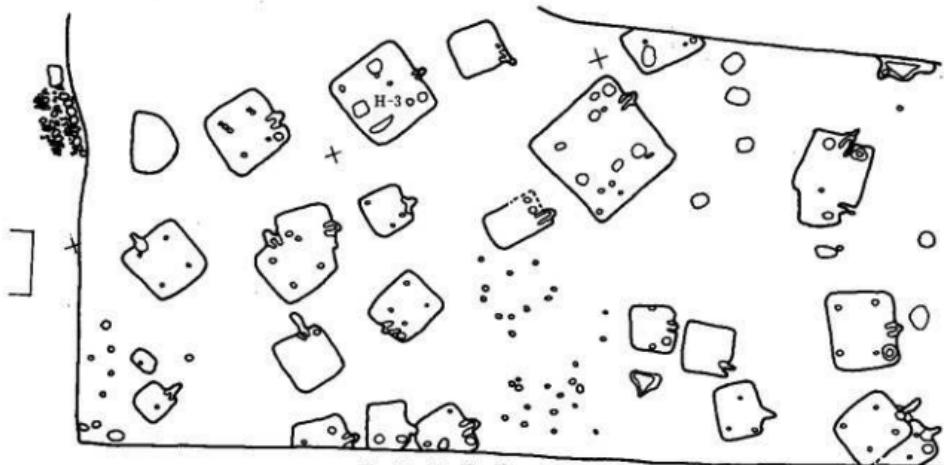
平成2年7月21日付けで前橋市青柳町字引切塚876-19外の宅地開発計画にかかる埋蔵文化財範囲確認調査依頼が市川建設株式会社より提出され、同8月8日に試掘調査が実施された。

この結果、古墳時代の住居跡等が検出され、開発者側に協議が必要である旨の回答を出す。

平成4年9月1日、市教育委員会と開発者側との間で協議がなされ、遺跡の現状保存は不可能であり、やむを得ず発掘調査を行なうこと。現地は昭和60年度に発掘調査が行なわれた引切塚遺跡と一体と思われる集落であり、その状況が明らかになっており、かつ盛土造成後、木造住宅建築のため地下構造損壊の虞れがないと判断し、道路部分のみの発掘調査を行なうこと、調査主体者は市教育委員会直営とすること等で合意をみた。



遺跡位置図



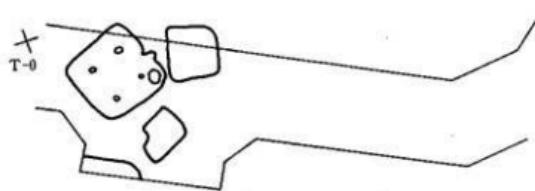
引切跡 遺跡

X
O-0

X

引切跡 II 遺跡

X
T-5



X
Y-5

X
Y-0

遺構配置図 1/400

II 位置と環境

引切塚II遺跡が所在する前橋市青柳町字引切塚876-19は、JR前橋駅の北方約5.2km、県道津久田停留所前橋線（通称石井県道）が大正用水にかかる直前で、赤城白川と県道に挟まれた所にある。本市の北端部にあたり、大正用水の北側は富士見村となる。

地質的には赤城火山斜面上に立地し、海拔140m程の標高にあり、火山噴出物による形成台地上に位置する。この台地の下は旧利根川の流路にあたり、旧利根川左岸上は縄文時代から平安時代に至る各種遺構が数多く存在している。

本遺跡地は、古墳時代の住居跡27軒・古墳（主体部のみ）1基他が調査された引切塚遺跡（昭和60年度）の南に接する。検出された遺構と遺物から、この遺跡と本遺跡は同一集落を形成するものと考えられる。

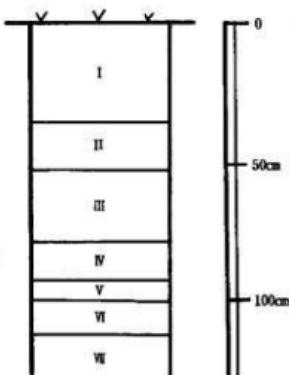
III グリッド設定

開発者側の設置した基準杭（X=47,628.635 Y=-68,258.460）を基に引切塚遺跡のA-0点（X=47,712.000 Y=-68,274.000）を変換し、引切塚遺跡との整合をはかることとした。従ってAから南方向へアルファベット、0から東方向へアラビア数字で表示し、4mピッチのグリッド設定である。本遺跡のグリッドは、調査終了後の全体図から、図面上に設定したものである。

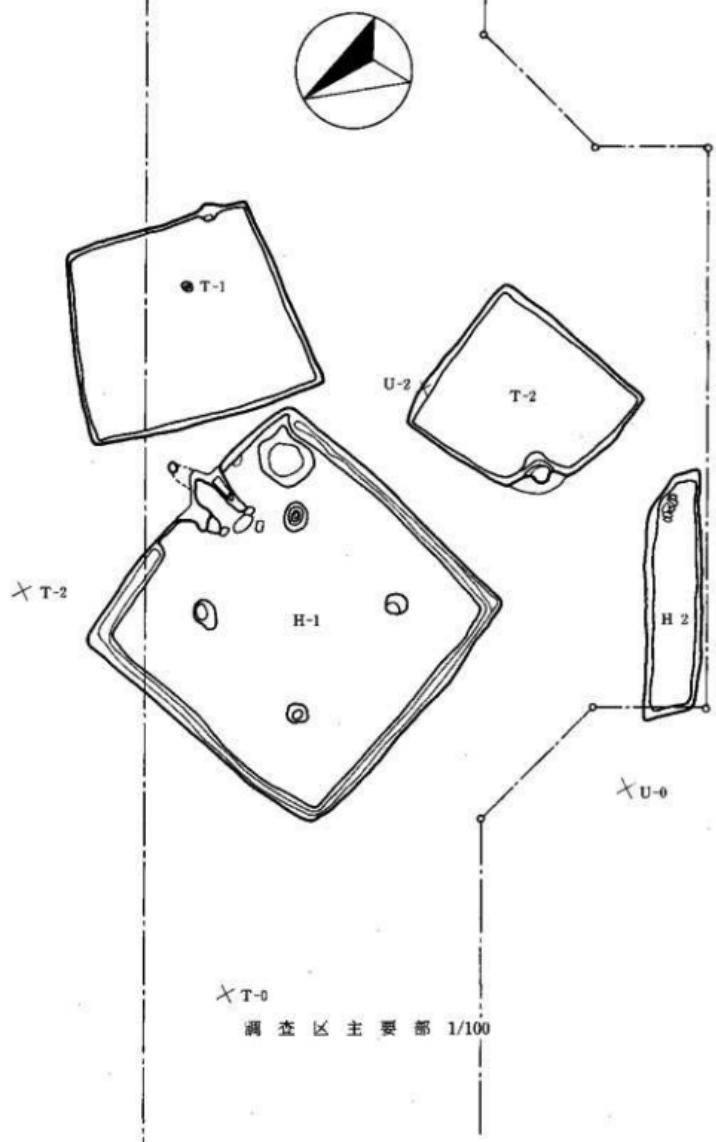
IV 基本層序

引切塚遺跡で確認されたように、この地は氾濫による堆積によって形成されたものと思われる。II層で小礫を含み、全体的に砂質であり、遺構も50cm程の石が混じっていた。この地質のうちで比較的指標になり得るもの的基本とした。

- I層 耕作土
- II層 小礫を20%含む暗褐色粗砂
- III層 B.Pを15%含む暗褐色細砂 締まり粘性ややある。
- IV層 1cm径F.Pを5%含む褐色微砂 締まり粘性あり。
- V層 炭化物土器粒を含む灰褐色細砂 締まり粘性あり。
- VI層 土器粒を僅かに含む褐色細砂 締まり粘性あり。
- VII層 褐色砂質ローム



標準層位 1/20



V 検出された遺構と遺物

1号住居跡 H-1

調査区の西端に位置し、北側角部は道路予定地外にはみ出る形で検出された。規模及び主軸方向は、引切塚遺跡のH-3号住居跡にはほぼ等しいが、H-3号住居跡の出土遺物点数が少ないため、正確には言い切れないがほぼ同時代に営まれた住居跡と思われる。

1号住居跡は東西5.56m南北5.52m、検出された深さ54cmを測る大型の住居跡である。床面は全面に平均4cm厚の貼床が施され、凸レンズ状に外縁部が低くなり、竈前から住居中央部は非常に堅緻である。住居内に直径40~46cm、深さ20~38cmの柱穴4基を持ち、壁際には幅14cm深さ6cm程の周溝がほぼ全周する。住居の南東側隅には直径86cm、深さ42cmの擂鉢状の貯蔵穴を有す。壁面の立上りは平均97°である。

竈は東壁の南寄り2/5の位置に設置され、主体部焚き口を住居内に有し、壁面に当る辺りから緩やかに立ち上り、一旦水平に延びた後に垂直に立ち上がって煙道部に繋がる。焚き口は安山岩を用いた鳥居形の石組みを持っていたと思われるが、現状では笠石は住居内に向かって崩落していた。

遺物の出土状況は、竈右袖外の床面から壊（1-1）が上向きで出土し、左袖外には甕（1-10）1個体分が押し潰された状態で検出され、その外側に壊（1-2）が床面に圧痕を残して伏せられた状態で見つかった。また壁際から甕（1-9）の断片が発見された。いずれも床面上の検出状況である。

貯蔵穴内には、床面から-13cmで塊（1-8）が伏せられた形で、さらに同-37cmで壊（1-3）が水平状態で検出されている。他の遺物はいずれも埋土中の出土である。

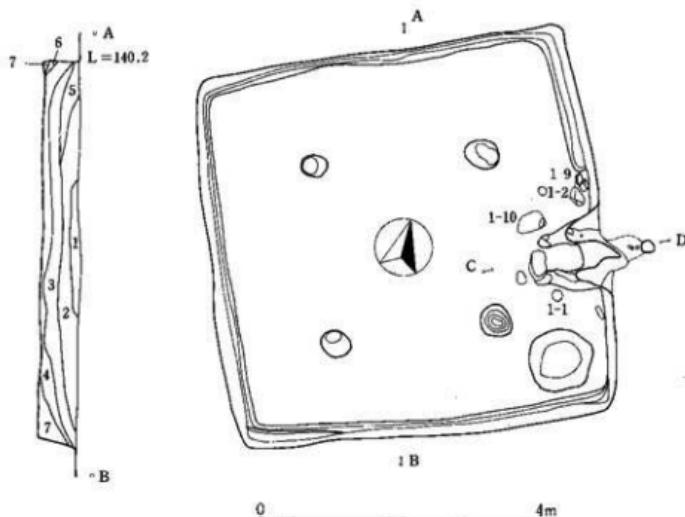
器形的には壊はいずれも有稜であり、稜部はヘラで厚みを削りだし、立ち上がりを内斜状に作り出す特徴を持つ。1-10の甕は底部を塊状に整えた後に、輪積みによって体部を重ね、縱方向のヘラ削りで調整を施しているが、外見上からも繋ぎの技法を看取ることができる。

2号住居跡 H-2

H-1号の南、調査区南端部の車回しにかかる住居跡の一部のみの調査である。長軸（東西方向）の長さは調査範囲で4.28m壁高52cm、壁の立ち上がり角100°を測る。住居跡の一隅しか確認できなかったが、平面プランは隅丸方形を呈していたものと思われる。床面は厚さ5cmの貼り床が施されていた。覆土中に浅間山起因のC軽石を含み、最も浅い部分で床上4cmの堆積であることから、C軽石降下時から遙くない時点で営まれた住居であると推察できる。

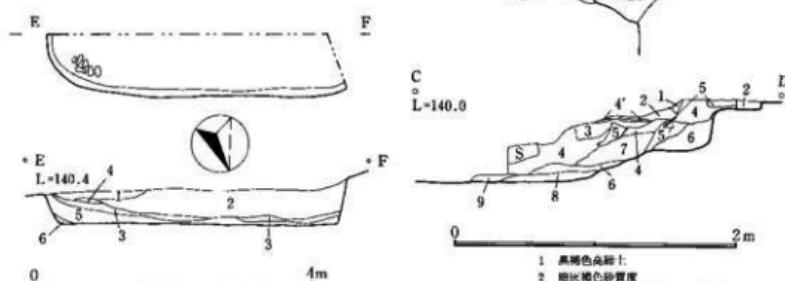
北東隅には蘆編み石状の集石が、床上約20cmの高さで整然と配列されていた。出土遺物は樽式土器と思われる甕の体部破片1点が床面に近い位置で出土している。他に検出された遺物は覆土中の流れ込みと思われる土器破片数点のみであった。

H-1 住居跡



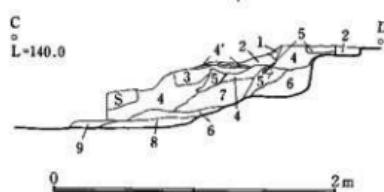
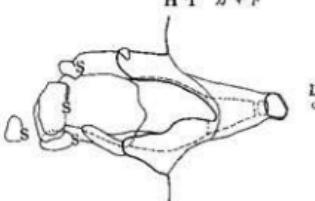
- 1 黒褐色砂質土。BPを10%含む。細砂。
- 2 黒褐色砂質土。BP7%、黄褐色砂質ロームブロックを含む。繊まりあるが粘性なし。細砂。
- 3 黒褐色細砂。繊より強く粘性を帯びる。BP20%混入。
- 4 灰褐色砂質土。繊より粘性なし。FP、ロームブロック混入。
- 5 墓石細砂。繊まりややある。敷地遺物、FPを僅か含む。
- 6 黄褐色砂質ロームブロック層。
- 7 黑褐色粗粒砂質土。FP7%、ロームブロック混入。

H-2 住居跡



- 1 黄褐色粗粒砂。繊より粘性なし。
- 2 黒色高級弱粘性粗砂。FP15%含む。灰褐色砂質ロームブロックを水玉状に混入。
- 3 黄褐色C P純層。
- 4 不規則粗粒砂。繊より粘性なし。C P10%混入。
- 5 黄褐色粗粒砂。繊より粘性なし。C P3%混入。水玉状ロームブロックあり。
- 6 陶瓦灰色細砂。繊より粘性あり。水玉状ブロックあり。

H-1 カマド



- 1 黒褐色高純土。
- 2 細粒黒褐色砂質土。
- 3 黒色高級土FP純土ブロック混入。
- 4 黄褐色粘土。
- 4' 黄褐色土。
- 5 赤褐色高級焼土。
- 5' 赤褐色砂状焼土。
- 6 粘土と黑色灰層。
- 7 黄褐色土に焼土ブロックを混入。
- 8 灰層。
- 9 灰層に粘土を混入。

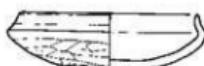
遺物観察表

番号	器形	径 高さ	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調 ②成形 ③機存 ④胎土
1-1 カマド右	土師器 环	12.3 4.1	口縁部内側部を垂直に削りだし5mm程の幅を持たせる。	体部へラ削り。 口縁部横ナデ。	口縁部から内側へ1cm程横ナデ。器内は同心円状にナデ削し。	①赤褐色②良好。外側1/5程二次焼成あり。 ③95%④密。粘石、石英、長石、石墨、砂を含む。
1-2 カマド左	土師器 环	12.4 3.9	内黒。口縁部内側。後部削りだし。	体部へラ削り。 口縁部横ナデ。	口縁部から内側へ2cm程横ナデ。ナデ調整後へラ磨き。	①外面褐灰色。二次焼成痕あり。内面黒褐色。 ②良好③完④密。砂粒を混入。
1-3 窓戻穴内	土師器 环	12.4 4.3	口縁部内側。へラ削りで後部を明確に作りだす。比重大。	体部へラ削り。 口縁部横ナデ。	後の上から内側に1cm程横ナデ。器内は同心円状のナデ削し。	①橙色②良好③完④密。石英、長石、石墨を含む。
1-4 環	土師器 环	(11) 4.6	口縁部外反。有孔。内黒。	底部へラ削り。 口縁部横ナデ。	口縁部横ナデ。底面ナデ調整後へラ磨き。	①橙色②良好③1/3弱④密。砂粒、粘石、石英、石墨を含む。
1-5 埋	土師器 环	(12.6) 3.4	外黒口輪であるが、端部は内窓戻向を示す。内黒。有孔。	底部へラ削り。 口縁部横ナデ。	口縁部横ナデ。底面同心凹状にナデ調整後へラ磨き。	①にいき橙色②良好③2/5④密。粘石、石墨を含む。
1-6 埋	土師器 环	(13.8) 4.9	口縁部外反。有孔。口縁部に段差を持つ。	底部へラ削り。 口縁部横ナデ。	口縁部横ナデ。底面ナデ調整。	①浅黄褐色②良好③1/3④密。砂粒、粘石、石英、長石、石墨を含む。
1-7 埋	土師器 高环脚部	(14.6) 10.9	柱状脚部に開口部地面を持つ安定した形。	柱状部はナデ調整後へラ磨き。 開口部横ナデ。	柱状部へラ削り。開口部横ナデ。	①暗黒色②良好③脚部3/4④良。砂粒、粘石、石英、長石、石墨を含む。
1-8 窓戻穴	土師器 塊	14.6 10.9	肉厚で大振り。口縁部は腰身で外反。口縁部と胴部にある最大径は等しい。	体部から底部へのへラ削り。口縁部横ナデ。	口縁部横ナデ。底部へラ削り。 底部へラ削りなるも剥離大。	①にいき橙色②やや良③70%④密。砂粒、石英、長石を含む。
1-9 壁際 小型器	土師器 壁際	14.1 9.1	肩部を明確にしない作り。	体部へラ削り。 口縁部上端横ナデ。	口縁部横ナデ。体部ナデ調整。	①明赤褐色。二次焼成痕あり。②良③20%④密。砂粒、粘石、石英、長石、石墨を含む。
1-10 カマド前	土師器 長颈甌	18.6 37.7	肩下半部に最大径を持つ。	へラ削り。口縁部横ナデ。	口縁部横ナデ。底部ナデ調整。 底部へラ削り。	①橙色。二次焼成痕あり。②良好③90%④密。粘石、石英、石墨を含む。
1-11 埋	土師器 長颈甌	21 (10.6)	つば広口輪。比重大。	口縁部横ナデ。 体部へラ削り。	口縁部横ナデ。体部ナデ調整。	①暗色。二次焼成痕あり。②良③1/4④粗。石英、長石、石墨を含む。
1-12 埋	土師器 甌	14.3 5.9	口縁が外反しながら立ち上がる。壺状か?	口縁部横ナデ。 体部へラ削り後ナデ調整。	口縁部横ナデ。ナデ調整。	①橙色②良好③口縁部60%④密。粘石、石英、長石、輝石を含む。

H 1 出土遺物実測図



1-1



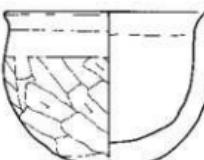
1-3



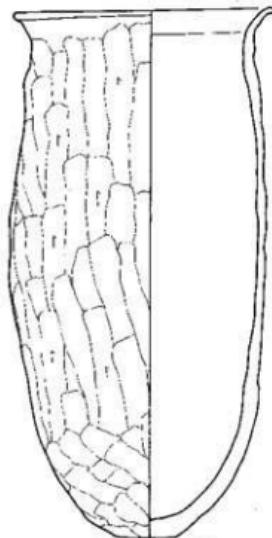
1-2



1-8



1-9



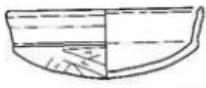
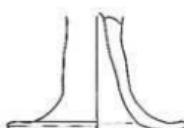
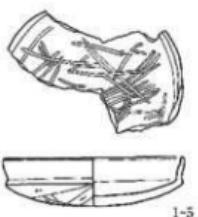
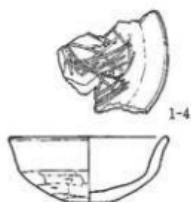
1-10



1-11

0 20cm

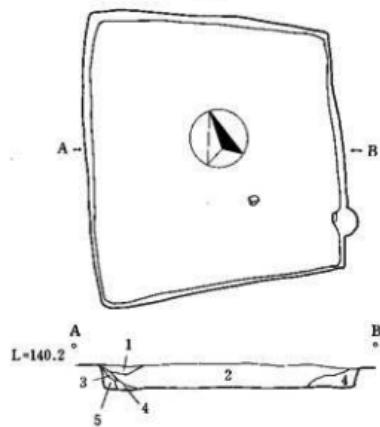
H-1 住居跡出土遺物実測例



0 20cm

堅穴状遺構

T-1



1号堅穴状遺構 T-1

平面プランは台形を呈し、長軸4.2m短軸3.32m東西軸3.4m深さ32cmの規模である。一部にやや堅い床と思われる面を確認したが、炭化物や焼土は全く検出されなかった。出土遺物も甕・壺等の土師製の小片数点のみであり、この遺構の用途・性格については不明である。

T-1

- 1 黄褐色砂質粘土層。FP、水玉状ブロック混入。
- 2 布褐色砂砂。締まりあるが粘性に欠ける。FP、水玉状ブロック含む。
- 3 布褐色砂砂。粘性純もあり。
- 4 1に黄褐色砂質ロームを含む。
- 5 2に黄褐色砂質ロームを含む。

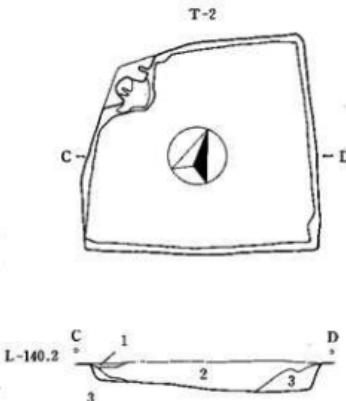
0 4m

2号堅穴状遺構 T-2

プラン確認時でT-1と同様の台形を呈していたため堅穴状遺構とした。精査の結果、安山岩の川原石剝片1点が出土したのみであり、T-1同様にこれもその用途・性格については不明である。形状は3.28mの最長軸と、3.06mの軸、さらに2.64mの2本の軸があり、深さ40cmである。西側の隅には砂質ロームの高まりが存在する。

T-2

- 1 黒褐色粘土層。BP 15%混入
- 2 黑褐色高筋粘土層。BP 3%混入
- 3 黑褐色砂砂。微結晶隕土。



0 4m

VI ま　と　め

今回の調査は、昭和60年度に調査された引切塚遺跡の南に接し、同一事業者による開発行為に先立つ緊急発掘調査である。調査に至る経緯で述べたように、限られた調査区での小規模調査であるが、引切塚遺跡との相互の関連を考える上で貴重な資料を得ることができた。

試掘当初の出土遺物から、本遺跡は引切塚遺跡と一緒に集落を形成するものと推定できたが、H-1号住居跡については、引切塚遺跡のH-3号住居跡と主軸走行方向及び大きさをほぼ等しくしている。この住居から出土した甕と壺は、引切塚遺跡のH-5、H-12、H-13、H-15、H-16、H-17、H-21の各住居跡から出土している遺物と器形・技法が良く似ている。遺物の形態的特徴から判断すると古墳時代の鬼高III期の所産と想定される。したがって、1号住居跡は引切塚遺跡と同一集落を営んでいたものと思われる。

H-2号住居跡は覆土中に浅間山起因のC軽石の純層を含んでいる。引切塚遺跡の住居跡からはC軽石を含む覆土の地層断面を持つものはみられない。住居の形態が隅丸を呈していることなどから、この住居は今まで調査された住居跡の中では最も古い時期のものと推定されるが、出土遺物からの傍証には欠ける。またこの住居跡は北東隅に集石が見られた。引切塚遺跡の15号住居は隅丸方形の平面プランであり、北西隅に集石を有するが、大きな川原石が床面直上に配されている。本住居跡の集石は小ぶりな安山岩の川原石が床面より高く配列されている点で前記のものとやや相違がある。この集石についての性格・用途については不明である。

性格・用途について不明なものは、T-1、T-2で表された竪穴状遺構も同様であり、さらに調査区の東際には風倒木痕状の土壤が1基存在したが、地層断面に反転層位が見られず、プランも人為的要素が全く認められない状態で検出されている。これは木根痕のような自然現象の一つとして処理をした。

以上のことから、今回調査された遺跡は引切塚遺跡と同一の集落であるとの認識を強めた。土地利用の推移としては、南側から北方へ集落が拡がっていたのではないかと想像されるが、一軒のみの資料では、あくまで推定の域を出ない。住居の埋没過程も、H-1号住居跡に50cmを超える川原石が含まれていることなどからして、今回の調査でも引切塚遺跡の調査報告書に記載されているように、天井川で知られる赤城白川の氾濫による影響を著しく受けていることを追認した。

おわりに、調査にあたり惜しみない協力を戴いた市川建設株式会社・篠原工務所と、資料確認に協力を戴いたスナガ環境測設株式会社に謝意を表すとともに、初めての経験にもかかわらず粉骨碎身の作業をして下さった皆様方に心よりの感謝を申し上げます。

参考資料：引切塚遺跡（前橋市埋蔵文化財発掘調査団 昭和60年）



1-1



1-3



1-2



1-4



1-10



1-6



1-7



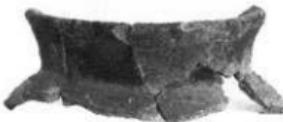
1-8



1-9



1-11



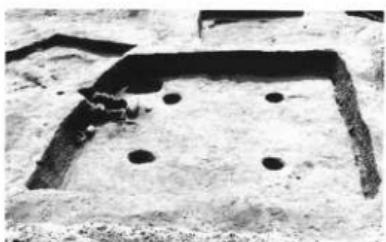
1-12



遺跡全 景



H-1 遺物出土状況



H-1 住居跡



H-2 住居跡



H-1 カマド



H-2 石組み状況



H-1 遺物出土状況



作業風景

調査概要

遺跡名称 引切塚II遺跡

所在地 群馬県前橋市青柳町字引切塚876-19

遺跡記号 2B3

調査期日 試掘調査 平成2年8月8日

発掘調査 平成4年9月24日～10月7日（実質8日）

調査面積 220m²

開発面積 2,889m²

調査原因 民間開発（分譲住宅建設）

調査依頼者 市川友久（前橋市三俣町三丁目31-17）

調査主体者 前橋市教育委員会 教育長 岡本信正

事務局 前橋市教育委員会 管理部長 有坂淳

文化財保護課 課長 町田重雄

埋蔵文化財係 係長 高橋正男



引切塚II遺跡

印刷 平成5年3月22日

発行 平成5年3月25日

発行者 前橋市教育委員会 前橋市大手町2-12-1

印刷所 上海印刷工業株式会社

大胡文化文書印

